

## わが神、わが神

受難節第3主日の今朝は、主イエスが十字架の上で叫ばれた「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」という言葉に聴いてゆきます。この主イエスのお言葉にはいわゆる元ネタがありまして、旧約聖書詩篇22篇の最初の部分の引用になっています。

イエス様が十字架の上で語られた7つの言葉を順番に上げると、おそらく次のようになると思われます。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」

「御覧なさい。婦人よ、あなたの息子です。～見なさい、あなたの母です」

「はっきり言うておく。あなたは今日、わたしと一緒に樂園にいる」

「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」

「渴く」

「成し遂げられた」

「父よ、わたしの魂を御手に委ねます」

以上ですが、このうち自分自身の死と真正面から向かい合ったお言葉がふたつあることに気づきます。ひとつが今日取り上げる「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という呼びかけ、問いかけであり、もうひとつが「渴く」というお言葉です。このふたつの言葉は死に向かい合った時に、わたしたち人間が直面するふたつの真実、つまり魂や霊といった言葉であらわす次元と、肉体の次元で直面する真実に関わっています。死を前にして引き起こされる反応というか、もっとわかりやすい言葉で言うと魂の悲鳴と身体の悲鳴と言えばよい

でしょうか。身体の悲鳴は十字架刑という自分の体重で引き絞られて次第に呼吸困難に陥り、失血もあいまって弱っていく。そういう肉体のあげる悲鳴が「渴く」というお言葉に集約されています。そしてその段階に到達するまでに人間が死に絡め取られてゆく時に味わう恐れ、理性をもつ存在であるがゆえに死を考えざるを得ず、自分を失う恐怖、どこへゆくのか分からない。死を恐ろしい終わりとして受け止めて土壇場で向き合う。あなたはわたしを顧みてはくださらないのか、捕らえてはくださらないのか、そのように言う資格が果たして自分にあるかどうかは別にして、救い得る方は神しかおられないがゆえに「わが神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という叫びが口を出る。神がわたしたちに息を与えたがゆえに、人が生きるものとなったように、いま神が、イエスから息を取り去ろうとしている。十字架に引き渡され、死が、終わりが迫る。息とは霊を意味する言葉ですから、神ご自身が息を引き取られる。霊を取り上げられる。それはわたしたちにとってわたしの終わりを意味するものとして捉えられるが故に、その不安、恐怖ははかりしれないものとなる。どうしてわたしをお見捨てになったのですか、という言葉は、神に捨てられた者、すなわち神に背いて生きる見当違いをしてきた者を聖書は罪人と呼ぶのですから、イエス様は「わが神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と詩篇の言葉を引用することによって、ご自身が神に捨てられる立場になられたことを言い表された。罪のない神の子が本当に罪人の立場に身を置かれたことが、このお言葉からわかる。ここが定まらないと、つまり、罪人が神から捨てられる存在であるということがはっきりと理解されないと、イエス・キリストの十字架がわたしたちの罪を贖った。イエス様の死によって、背きの罪が償われた

がゆえに、わたしたちはもはや神の怒りのもとにいない。刑罰としての死、神無き死を死ぬことは無くなったと確信することが出来なくなります。わたしたちは聖書を通して、自分が罪人であることを認めるように招かれている、と言ってよい。それはすべてわたしたちの救いのために必要不可欠なことだからです。わたしは罪人であることを信じさせて頂くといったらよいかもしれません。それをイエスさまの恵みにおいて知ることが救いなのです。イエス様が、わたしに代わって神に捨てられる立場に身をおいてくださったがゆえに、そしてそれは本来有り得ないこと、神の子が、神に捨てられるという身を割くような出来事がそこで起きた。本来ならば、裁くお方が裁かれて死ぬ。神に見捨てられて、刑罰としての死を死んで陰府にくだる、この死の絶望の深さというものを、わたしたち人間はついに知ることは出来ないでしょう。ただ神の子が神に捨てられるという、有り得べからざる出来事が起きたことによって、全人類が、このキリストの十字架の死に、自分の罪を釘付けにすることが許された。キリスト・イエスが、わたしたちの罪を十字架で支払って下さったという神の真実を知るのです。「わが神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という叫びは、死に直面する場合の人間の霊の不安・恐れをあますところなく伝えると共に、神に見捨てられた方となられたイエスをはっきりと人々に記憶させるものとなっています。わたしは高校生に聖書の話をするときにギリシア・ローマの古典古代の時代に後の世に伝えられる三つの死があると話すことがあります。ソクラテスの死と、カエサルの死と、イエス・キリストの死です。カエサルは元老院で暗殺されます。「ブルータス、お前もか」というセリフが有名ですが、まあこれはいいです。問題は、ともに刑死したソクラテスとイエスです。ソクラテスは青年を惑わ

すということで牢に入れられ、毒の杯を飲んで死にます。弟子たちが逃げるように勧めますが「悪法もまた法なり」と言って、都市国家の秩序に背くことを潔しとせずに監獄で死にます。ナザレのイエスは十字架で死にます。大切なポイントはソクラテスと違ってイエスは監獄の中ではなく、衆人環視のもとで死んだことです。ピラトの書いた「これはユダヤ人の王」と記された罪状書きが十字架に打ち付けられました。イエスの死はすべての人に公開されていたのです。さらし者としての死、嘲られての死、それゆえにだれもそこでこのようなことはなかった、起こらなかつたとは決して言えない死、確かに、この方が十字架で死なれたということを皆が目撃する証人となる。そこに神の深いご計画が在りました。その方が「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫んだのです。人々はそれを聞いた。そしてこの言葉はアラム語であったので分からない人もいたのか、あれはエリヤを呼んでいるのだ、どうなるか見ていようと、そういう反応をする者たちがいたことを福音書記者マタイは記しています。神に捨てられて死ぬイエスを皆が見ていた。証人となった。多くの者は見世物として楽しんでいたのではなかつたか、興味深いのは、正午になると全地が暗くなつたと記されることです。これはもちろん主イエスの死の特別さを表すための神話的な脚色かもしれませんが、実際に、そういう気象現象が観測されたのかもしれません。ルカはそういう書き方をしています。ただこの後のイエスさまの「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という叫びを考えますと、天地が暗くなつたというのはイエス様から見た主観的な表現、聖書はそういう描写はほとんどしないのですが、死を前にしたまさに暗闇の迫る心象風景を描き出しているようにも読みたくなります。わたしにとっての光

り輝く世界の消滅、生ける者の世界から急速に光を失って闇の世界へと意識が遠のいていく死の現実が迫っている時に、イエス様は命の世界に、光の世界に、しがみつくなかのように叫ばれた。この叫びは、わたしたちのために叫ばれなければならなかった。この叫びがなかったならば、わたしは自分の罪が本当に、イエス様によって担われたのだということを信じる事が出来なかったでしょう。そして、キリスト・イエスがこのように叫んで死んでくださったがゆえに、完全な死が、完全な赦し、神との敵対関係の終わりとなり、新しい出来事が、新しい神様との関係が三日目の復活によって始まることを信じさせていただける。そう言うことがわたしたちにも許されるのです。

宗教改革者のマルティン・ルターが「死への準備への説教」のなかでこのことを素晴らしい言葉で表現しています。あなたは、死を、死そのものとして見たり考えたりしてはいけません。死を自分において、自分のもろい人間としての性質において、もしくは、神の怒りにおいて殺された人々や、死に打ち負かされた人々において見たり考えたりしてはいけません。～むしろ、あなたは、あなたの目と心の思いとすべての感覚を死の形相（ぎょうそう）から強引に引き離して、死をただ神の恵みの内に死に、かくて死に打ち勝った人々、ことにキリストと、ついでキリストの聖徒たちにおいてのみ見るように、たゆまず努力しなければならない。キリストは生命以外のなにものでもない。この姿を深く、心に銘じ、注視すればするほど、死の形相は剥げおち、あなたの心は平和を得、キリストとともに、またキリストにおいて、安らかに死ぬことができる。罪を、罪人において、またあなたの良心において見てはいけません。またいつまでも罪の中にとどまって罰に定められた人々において見てもいけません。～むしろ、あなたの思いを転じて、罪を恵みの姿

以外のところにはどこにも見ないようにし、全力を尽くして心に刻みつけ、また目の前に持っていなければいけない。恩恵の姿とは、十字架上のキリストと、キリストのすべての聖徒たちにほかならない。十字架のキリストがあなたの罪をあなたから取り去り、それをあなたに代わってにない、その息の根をとめてくださる。これが恩恵であり、憐れみなのである。このことを堅く信じ、目の前に持ち、これを疑わないこと。心に銘じること。こうしてあなたは、あなたの罪を安んじてあなたの良心のそとに見ることができる。見よ、その時、罪はもはや罪ではなくなり、克服され、キリストのうちに吞まれてしまっているのである。キリストがあなたの死をご自分の身に負い、その息の根をとめてくださる。キリストがあなたのためにそうしてくださることを信じ、あなたの死をあなたのうちに見ることなく、キリストのうちに見るならば、死はあなたを損なうことはできない。それと同じように、キリストはあなたの罪をもご自身の身に負い、これを、あなたのために全き恩恵によって、ご自身の義において克服してくださるのである。あなたがこのことを信じるならば、罪は決してあなたを損なうことはない。こうして、生命と恩恵の姿なるキリストは、死と罪の形相に対するわたしたちの慰めである。

この慰めのために、キリストが「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれたことを、心に刻む受難節の日々としたく願います。

お祈りします。